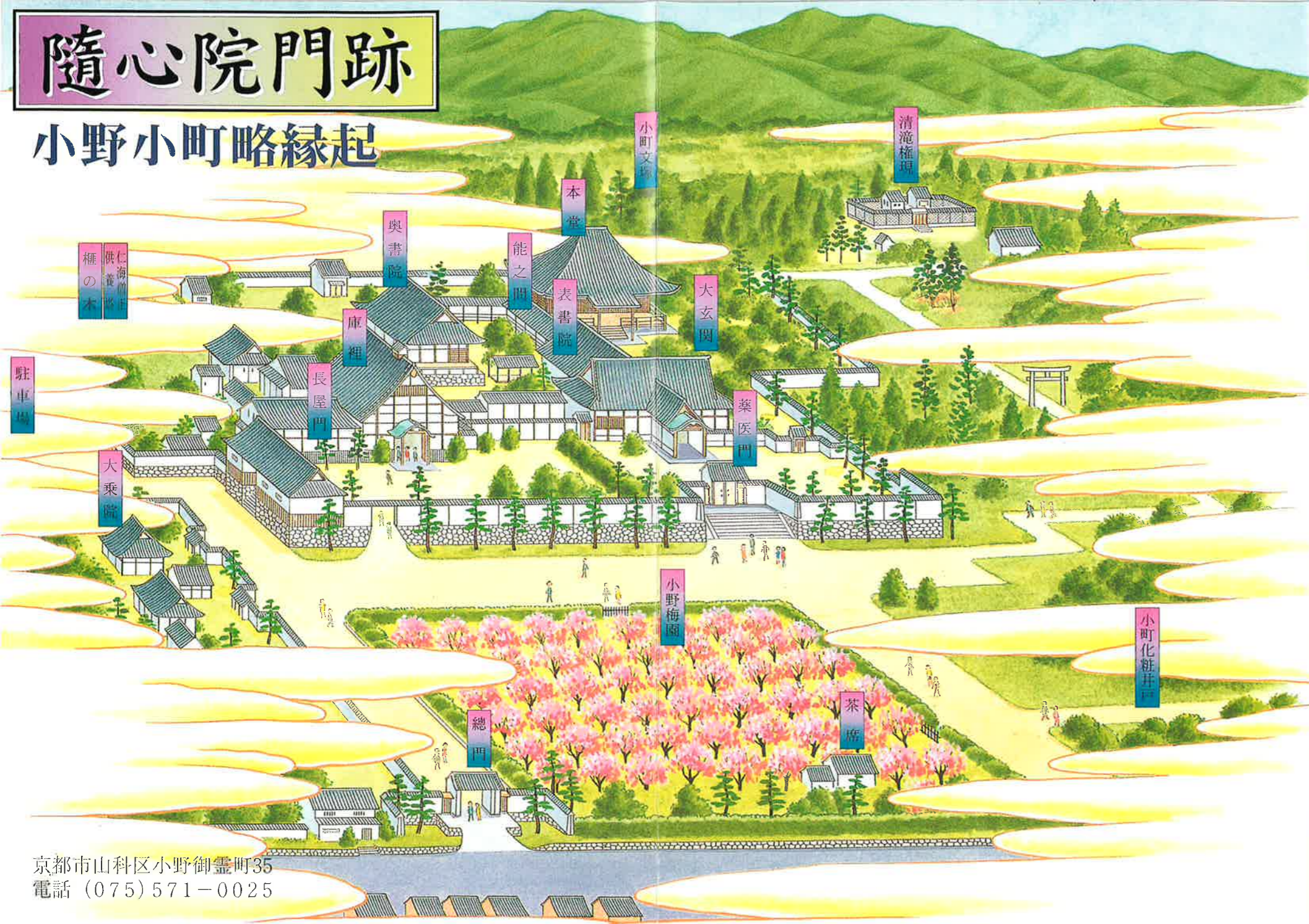


隨心院門跡

小野小町略縁起



京都市山科区小野御霊町35
電話 (075) 571-0025



阿弥陀如来



金剛薩埵

隨心院 年中行事



- 一月 修正会
- 二月 常楽会
- 三月 観梅会 (一日~三十一日)
はねず踊り (最終の日曜日)

- 四月 桜・しゃくなげ・霧島つつじ
- 五月 開山忌 (十六日)
平戸つつじ・さつき



- 六月 杉苔・のうぜんかずら
- 八月 施餓鬼法会
- 九月 放生会 (敬老の日)

- 十月 小品盆栽展
土砂加持法会
- 十一月 小町祭 (ミス小町決定)
紅葉・ライトアップ
小町忌



※隨心院門跡の由緒(史跡)

当山は、真言宗善通寺派の大本山にして、弘法大師御入定後、百二十一年、弘法大師より八代目の弟子にあたる、仁海僧正の開基にして、一条天皇の正暦二年(西暦991年)奏請して、この地を賜り一寺を建立されました。古くは牛皮山曼荼羅寺と、称されました。仁海僧正一夜の夢に亡き母が牛に生まれ変わっていることを見、その牛を鳥羽の辺に尋ね求めて飼養しましたが、日なくして死に、悲しんでその牛の皮に兩界曼荼羅の尊像を画き、本尊としたことに因んでいます。牛皮山は仁海僧正が牛の尾を山上に埋めて菩提を弔つたと伝えられています。又、仁海僧正は深く宮中の御帰依を受け、勅命により、神泉苑(御池大宮西)に請雨の法を九回も行い、その度に靈驗あつて雨が降つたので、雨僧正とも称されました。その後第五世、増俊阿闍梨の時に曼荼羅寺の子房として隨心院を建立し、ついで第七世、親嚴大僧正が寛喜元年(西暦1229年)後堀河天皇より門跡の宣旨を賜わり、以来隨心院門跡と称されています。堂舎も次第に整備され七堂伽藍は壮美を誇っていましたが、承久應仁の兵乱にあつてことごとく灰となつてしまいました。その後慶長四年(西暦1599年)に本堂が再建され、以後、九条二条両宮家より門跡が入山し、両宮家の由緒をもつて寄進再建されました。

※建築 仏像 宝物

本堂 慶長四年(西暦1599年)、桃山期の建築で、寝殿造りの堂内には本尊ならびに諸仏が奉安されています。

薬師門 玄閻 書院 いずれも寛永年間(西暦1624年~1631年)の建築で九条家ゆかりの天真院尼の寄進によるものです。玄閻の左右に小玄閻、使者の間があり、襖絵は狩野永納の時代のもので花鳥山水の図、四愛の図が描かれています。

奥書院 徳川初期の建造で、狩野派の筆による舞楽の図、節会饗宴の図、賢聖の障子、虎の図よりなっています。

能の間 宝暦年間(西暦1751年~1764年)九条家の寄進によるもので平成三年に改修されました。総門 庫裡 宝暦三年(西暦1753年)二条家より移築されたもので、庫裡は二条家の政所であつたものです。

本尊如意輪觀世音菩薩座像 鎌倉時代の作

阿弥陀如来座像 平安朝藤原時代 定朝作(重要文化財)

金剛薩埵座像 鎌倉時代 快慶作(重要文化財)

薬師如来座像 平安時代

不動明王立像 平安時代 知証大師御作

小野小町文張地藏尊像 平安時代小野小町作(伝)

卒塔婆小町座像 鎌倉時代 恵心僧都作

三十六歌仙 小野小町歌仙切 室町時代作

愛染曼荼羅 平安時代(重要文化財・博物館出陳)

蘭亭曲水屏風 (二双) 桃山時代狩野山雪筆(重要文化財)

古今集序 (一幅) 平安時代 小野道風筆

※小野小町由緒の遺跡

古来、小野と呼ばれていたこの地は『和名抄』の「小野郷」に相当し、小野氏の栄えたところであり、醍醐天皇陵東には小野寺と称する小野一族の氏寺の遺跡が近年発見され、この地方の大宅、和爾、宮道氏と共に勢力を持っていました。

『群書類従正編』によれば、小町は小野篁（たかむら）の孫にあたり、出羽の国司を勤めた良実の娘であるとされています。又、『日本人名辞典』には、出羽の郡領小野良実の娘にして、仁明の朝五節の舞姫として、宮中の後宮に任せ、容貌秀絶にして、一度笑めば百媚生じ、又、和歌は巧にして、懐婉女流第一の名手たり、とうたわれています。

なお、当時の書家小野道風は小町の従兄にあたる人です。小町の生涯は判然とはしませんが弘仁六年(西暦815年)頃生まれ、平安朝初期、仁明天皇が東宮にあられた時より崩御されるまでお側に仕え特に盛艶優美、詠歌の妙を得た小町は東宮の寵幸を一身に受け、

即位されてからは更衣として仕えられました。嘉祥三年(西暦850年)、仁明天皇御年四十一才にて崩御された後、山城国深草の山陵に葬られ、俗に深草帝と称されました。仁明の御代も終わり、年改まった仁寿二年(西暦852年)、三十才を過ぎた頃宮仕えをやめて、小野の里に引きこもり晩年の余生を送つたと伝えられています。『都名所図繪』には、「小野隨心院、勅修寺の東なり、曼荼羅寺と号す、又、小町水、門内南の藪の中にあり、此の所は出羽郡領小野良実の宅地にして、女小野小町つねに此の水を愛して艶顔を粧ひし」とあります。又、この地に語り伝えられる最も有名なものは深草少将、百夜通(ももよがよい)の話でありましょう。

小町を慕つて小野の里に、雨の夜も雪の夜も通いつづけたが九十九日目の夜、降る雪と発病により最後の一夜を前に世を去つた深草少将の伝説であります。この時小町は櫃（かぶ）の突にて数を取り後に小野の里に播いたと言われています。夢にしか逢えない人を思い、多くの夢の歌を残し、後世六歌仙の第一人者と評され、小倉百人一首の「花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」と哀愁に富み、情熱的な歌は華やかな盛艶時代を想い、人生のはかなさを歌つたのはあまりにも有名であります。この世を去つたのも又、判然としませんが仁和寛平の頃、七十才を越して亡くなつたと伝えられています。

小野小町文張地藏尊像



多くの人がびとから寄せられた文を下張りして作り、罪障消滅を願うとともに有縁の人びとの菩提を祈つたもの、と言われています。

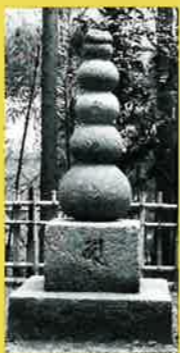
卒塔婆小町座像



小町晩年の姿を写したものと云われ、とくに座法は古代の風習を伝えた珍しい像です。

文塚

境内の本堂裏にあり、深草少将をはじめ当時の貴公子たちから小町に寄せられた千束の文を埋められたところ、と伝えられています。



化粧の井戸

小野小町の屋敷跡に残る井戸で、小町が朝夕この水で粧をこらしたと、『都名所図繪』に記されています。



小野の里に茂る櫃の大木 深草少将の百夜通いの折、小町は櫃の実を糸に綴つて数をとりに、後にその実をこの地に播いたもので、かつては九十九本あつたと伝えられています。昔の名残りをとどめて、今日でも櫃の実の上部左右対称に糸に綴つた小さな跡が見られます。



深草少将百夜通いの道 化粧井戸の西側にあり、深草から小野に通じる小径として、かつてはひなびた茶店が跡を守っていましたが、今では跡形もとどめていません。